

はじめに

流行歌に作曲家がメロディーを付け始めたのは、レコード産業が成立してからである。

日本では、昭和の時代と歩みをともしにするが、まず作曲家の一番星になったのが中山晋平だった。

外資系のビクターから、西條八十作詞、佐藤千夜子が歌った「東京行進曲」の作曲で世に知られるが、ついで古賀政男がコロムビアから高橋掬太郎作詞の「酒は涙か溜息か」の作曲と、詞も自ら書いた「影を慕いて」を、東京音楽学校（現東京藝大）最大の傑作の折紙つきのベルカント歌手・藤山一郎（本名・増永丈夫）に歌わせ、蓄音機が、植民地だった台湾・朝鮮を含めて、日本全国にわずか二十万台といわれた時代に、それぞれ百万枚の大ヒットをさせたのだった。

中山晋平の曲が、民謡的な匂いのただよう素朴感のあるメロディーだったのに対し、古賀メロディーは、都会的な哀愁感が嫋々と流れ、そのやるせないひびきが大不況下の暗い世相に共鳴して、狂乱に近い大ヒットになったのである。

古賀政男は、マンドリンの演奏からギターに転じ、独学で作曲を志していた。「影を慕いて」と同時期に、「酒は涙か溜息か」を作曲しているが、短い二行詞にどう曲を付ければいいのか一ヶ

月余苦しみ抜いた末に、古賀メロディーの原点となる、やるせない哀愁に彩られた曲調を編み出したのである。

古賀について、江口夜詩<sup>よし</sup>、佐々木俊一、阿部武雄、古関裕而<sup>ゆうじ</sup>らが輩出するが、昭和時代に古賀メロディーに比肩する作曲家は服部良一だった。

服部は、ジャズのフィーリングを流行歌に同化させた才人で、大阪道頓堀のうなぎ料亭の少年音楽隊を振り出しに、亡命白系ロシア人、エマヌエル・メッテルに作曲法を学び、「別れのブルース」「湖畔の宿」「蘇州夜曲」「青い山脈」と、昭和歌謡史に燦然と輝やく名曲の数々を誕生させている。

日本の流行歌は、服部メロディーの登場によって、古賀メロディーの日本系に対比する、外国系のメロディーの流れを、日本に誘導する契機を作ったのである。

メロディーに国境はなかった。

海外でヒットした歌の詞は日本語に訳さないことには、日本人に通じなかったが、曲はアメリカのジャズ、ロカビリー、ハワイアン、ウエスタン。ラテン音楽のマンボ、タンゴ。フランスのシャンソンであろうと、聴いて情感に訴えるものがあり、素敵なメロディー、リズムと感じたら、即刻に受け入れられた。

海外のヒット曲は、ストリートに日本に入って来て大流行して不思議はなかった。

日本の作曲家は、それらの曲のヒット以前にリサーチを怠りなく、同工異曲の作品を量産し

ていた。その顔ぶれも多彩をきわめていた。

しかし、本書に登場願った作曲家は、いろいろなデータは参考にしたが、独断と偏見のそしりは覚悟の上、二十人と代表曲五曲に限らせていただいた。

一瞥すればおわかりのように、「リンゴの唄」などを作曲した万城目正、マジオ歌謡でお馴染みの八洲秀章、「リンゴ追分」の米山正夫、「東京の花売娘」の上原げんと、「骨まで愛して」の北原じゅん、「天使の誘惑」の鈴木邦彦等々……。歌謡曲通であつたら、たちどころに思い浮かぶ作曲家の項がないことに、不服・不満を持たれることは覚悟の上である。

多士済々が活躍する歌謡界、それらの優れた曲譜を生み出した才子たちの横顔は、いずれ何らかの方法で綴りたいと思っている。

塩澤 実信



歌謡曲が輝いていた時

昭和の作曲家20人100曲

● 目次

はじめに

..... 1

古賀政男（こが・まさお）

..... 13

「影を慕いて」

「誰か故郷を想わざる」

「湯の町エレジー」

「柔」

「悲しい酒」

服部良一（はっとり・りょういち）

..... 29

「別れのブルース」

「蘇州夜曲」

「夜のプラットホーム」

「東京ブギウギ」

「青い山脈」

古関裕而（こせき・ゆうじ）

..... 45

「暁に祈る」

「雨のオランダ坂」

「フランチェスカの鐘」

「イヨマンテの夜」

「君の名は」

渡久地政信（とくち・まさのぶ）

..... 61

「上海帰りのリル」

「お富さん」

「夜霧に消えたチャコ」

「島のブルース」

「池袋の夜」

浜口庫之助（はまぐち・くらのすけ）

..... 77

「愛して愛して愛しちやったのよ」

「バラが咲いた」

「恍惚のブルース」

「夜霧よ今夜も有難う」

「人生いろいろ」

吉田正（よしだ・ただし）

…………… 93

「異国の丘」

「落葉しぐれ」

「有楽町で逢いましょう」

「誰よりも君を愛す」

「いつでも夢を」

いずみたく

…………… 109

「夜明けのうた」

「世界は二人のために」

「恋の季節」

「夜明けのスキヤット」

「いいじゃないの幸せならば」

中村八大（なかむら・はちだい）

…………… 125

「黒い花びら」

「上を向いて歩こう」

「明日があるさ」

「帰ろかな」

「世界の国からこんにちは」

船村徹（ふなむら・とおる）

…………… 141

「別れの一本杉」

「王将」

「矢切の渡し」

「風雪ながれ旅」

「みだれ髪」

遠藤実（えんどう・みのる）

…………… 157

「からたち日記」

「高校三年生」

「星影のワルツ」

「くちなしの花」

「北国の春」

市川昭介（いちかわ・しょうすけ）

…………… 173

「涙を抱いた渡り鳥」

「涙の連絡船」

「夫婦春秋」

「大阪しぐれ」

「夫婦坂」

鈴木淳(すずき・じゅん)

「小指の想い出」

「霧にむせぶ夜」

「雨に濡れた慕情」

「四つのお願い」

「なみだ恋」

平尾昌晃(ひらお・まさあき)

「ミヨちゃん」

「霧の摩周湖」

「わたしの城下町」

「二人でお酒を」

「カナダからの手紙」

.....  
189

.....  
205

猪俣公章(いのまた・こうしょう)

「女のためいき」

「港町ブルース」

「空港」

「大阪ラプソディー」

「あばれ太鼓」

中村泰士(なかむら・たいじ)

「今は幸せかい」

「愛は傷つきやすく」

「喝采」

「わたしの青い鳥」

「心のこり」

筒美京平(つつみ・きょうへい)

「ブルー・ライト・ヨコハマ」

「男の子女の子」

.....  
221

.....  
237

.....  
253



「木綿のハンカチーフ」

「魅せられて」

「ギンギラギンにさりげなく」

三木たかし（みき・たかし）

「夕月」

「みずいろの手紙」

「まわり道」

「つぐない」

「北の螢」

浜圭介（はま・けいすけ）

「終着駅」

「折鶴」

「雨の慕情」

「望郷じよんがら」

「北空港」

……………  
269

……………  
285

弦哲也（げん・てつや）

「おゆき」

「ふたり酒」

「人生かくれんぼ」

「天城越え」

「北の旅人」

都倉俊一（とくら・しゅんいち）

「どうにもとまらない」

「五番街のマリーへ」

「ペッパー警部」

「あずさ2号」

「UFO」

……………  
317

……………  
301

★作曲者は生年順に掲載しました。

★曲目は発売順に掲載しました。

★文中敬称は省略させていただきました。

歌謡曲が輝いていた時

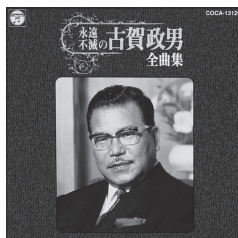
昭和の作曲家  
20人  
100曲



# 古賀政男

(1904～1978)

福岡県大川市生まれ。明治大学商学部卒。昭和を代表する作曲家。「影を慕いて」をはじめ生涯に制作した曲は5000曲といわれ「古賀メロディー」として親しまれている。



## ● 古賀メロディーの時代

演歌の大御所・古賀政男は、昭和期を代表する作曲家である。七十三年の生涯に、五〇〇〇曲ともいわれる古賀メロディーを生み出して、戦前・戦後を通じてヒット曲の多さでは、断然、他を圧している。

概して、流行歌の賞味期限は短いものだが、古賀メロディーは三十年、五十年と歌いつづけられるエバークリーン曲が多いのだ。

「酒は泪か溜息か」「影を慕いて」「サーカスの唄」「東京

ラブソング」「人生の並木路」「誰か故郷を想わさる」「なつかしの歌声」「悲しき竹笛」「湯の町エレジー」「トンコ節」「無法松の一生」「東京五輪音頭」「柔」「悲しい酒」……ヒット曲の十数曲を並べただけでも、古賀メロディーの魅力がよくがえらすことができるだろう。

作曲家としてのスタートは、昭和五年二月、レコード歌手の一番星・佐藤千夜子の知遇を得て作曲した「文のかわり」であった。

九州は水郷の都・柳川近くの大川に明治三十七年に生ま

れていて、少年時代に大正琴で音楽に目覚め、マンドリン、ギターでクラシック音楽を研鑽する中で、弦楽器の繊細なトレモロをとり入れたメロディーに目覚め、作曲を志すようになった。

明治大学商学部を卒業後、昭和六年、日本コロムビアの専属となった。信じられないことだが、当初、作曲に自信が持てず、文芸部の社員を希望していたが、東京音楽学校（現東京芸大）出身の増永丈夫に邂逅したことで、作曲家としての大道が拓けた。

「上野（芸大）最大の傑作」

の折紙つきのベルカント歌手は、芸名を日本一の富士山に因んで藤山一郎と命名。古賀政男の実力を決定づけた「影を慕いて」「酒は泪か溜息か」を歌い、大ヒットさせた。

昭和の初めは、大衆が皆で歌える歌は少なかった。その空隙を突いて古賀メロディーは誕生したのである。都会的な哀愁味が嫺々と流れるやるせないひびきは、大不況下の暗い風潮に共鳴し、出す曲は次々にヒットしていった。

昭和八年、松平晃が歌った「サーカスの唄」が大ヒットしている最中、古賀は離婚騒

動で体調を崩し、伊東温泉に静養に赴いた。その旅先で新興レコード会社テイチクの社長に口説かれて、制作を一任された専務に迎えられ、藤山一郎、ディックミネ、楠木繁夫、美ち奴などを擁して、「緑の地平線」「二人は若い」「東京ラプソディ」「あゝそれなのに」「青い背広で」「人生の並木路」など、ヒット曲を独り占めする超人的な活躍をする舞台に恵まれた。

昭和十三年秋、外務省の音楽文化親善使節として渡米するが、渡米直前にコロムビアに復帰して、それが帰国

後、霧島昇、ミスコロムビア、藤山一郎らのヒット曲、「誰か故郷を想わざる」「目無し千鳥」「新妻鏡」「なつかしの歌声」などを生む動機になった。

しかし、戦時下とあって、古賀メロデーは軍国歌謡には馴染まず、わずかに昭和十六年、霧島昇・松原操・李香蘭が歌った「そうだその意気」（国民総意の歌）と、歌うスター高峰三枝子の「南の花嫁さん」で存在感を示したにすぎなかった。

「国民総意の歌」と銘打たれた「そうだその意気」は、時

の権力者に迎合した歌だったが、軍の一部には、「戦意を高めるところか、悲しくなるような軟弱歌じゃないか」と非難された。

古賀はお上の糾弾きゅうだんに対し、「この言葉にはこの曲しか作れません。お気に召さないのなら、他の人に頼んで下さい」と開き直り、その末に採用されていた。

古賀は、戦時下にあっても、軍には協力的ではなかったが、決して無関心ではなく、「忠烈大和魂」「軍国の母」「殉血爆弾二将校」「勇敢なる航空兵」「戦士の道」「血染の

戦闘帽」と、歌謡には馴染まない無骨な題の曲も書いていた。

だが、哀調が底に流れる古賀メロデーは、このような詞のヒットには結びつかなかった。

### ●最晩年の姿は

古賀政男の戦後は、霧島昇の「麗人の歌」「旅役者の唄」、近江俊郎・奈良光枝デュエットの「悲しき竹笛」、二葉あき子の「恋の曼珠沙華」を経て、戦後最高のヒットの一つといわれる「湯の町エレジー」に実っている。

# 服部良一

(1907 ~ 1993)

大阪市生まれ。ジャズで感性を磨いたヒット曲の数々で、昭和の音楽シーンを代表するひとり。息子に作曲家の服部克久、孫に服部隆之という音楽一家でもある。



## ●ブルース歌謡の第一号

服部良一は、姉の勧めで一番の成績で入隊した、大阪は道頓堀の出雲屋少年音楽隊のオーボエ、サククス、フルートの奏者が振り出しだったが、亡命白系ロシア人であるエマヌエル・メッテルに見出され、四年間にわたり音楽理論・作曲・指揮の教えを受けていた。

父親は土人形師だったが、家族はみんな芸事が好きで、良一も「江州音頭」や「河内音頭」を、子守唄がわりにして育った。

はじめは商人を目指して昼は働き、夜は大阪市立実践商業に通うという日々を送っていた。

長じて、生活のためにジャズ喫茶でピアノを弾いたり、弱小レコード会社のタイヘイでジャズの編曲をしていて、昭和八年にディックミネのすすめで上京。ダンスホール『ユニオン』のバンドリーダー、サクソフォン奏者、ニットレコードの音楽監督を経て、昭和十一年、大手レコード会社コロムビアの専属作曲家に迎えられる。

第一回到淡谷のり子が歌う



「おしゃれ娘」を作曲するが、スウィングジャズのイデオロムを自在に取り組んだ当時としては斬新な曲で、一躍、注目浴びた。

ブルース歌謡の第一号となる「別れのブルース」は、黒人ブルースをベースにした本格的な曲だった。その頃、無名で貧乏だった藤浦洗（こら）に三十円のポケットマネーを渡し、「横浜の本牧あたりを取材して詞を作ってくれないか」と頼んだのだった。

藤浦は当時を回想し、「歌詞としては、たいへん風変わりなものだった。が、ブルー

スの小節や数や長さを勘定して、私は書いたのである。題は『本牧ブルース』であった。『これ、これ！』

と、服部はその原稿を右手で高く振ってくれた。気に入ってくれたのである。曲ができたのは、それから五、六日目だった。」

曲が先に作られ、詞をはめこんだものだが、歌は、「ソプラノには無理よ」と逃げる淡谷のり子を口説き落し、できるだけマイクに近づき、アルトの音域で歌ってもらい、ブルースの雰囲気を出した。当時、満州といわれた傀儡

国家の大連のダンスホールで活躍していたトランプペッター・南里文雄が「別れのブルース」を認め、演奏したことから、国内より先に満州方面から流行しはじめるという、めずらしい流れとなり、この曲は作詞・作曲・歌手を一挙に世に出すことになった。

そして、次に淡谷に歌わせた野川香文作詞の「雨のブルース」のヒットにつながった。

「雨のブルース」には、南里文雄の吹奏がフィーチャーされていて、私はその件を『南

里文雄物語』に次のように書いている。

「当時、『ブルース』という聞きなれない横文字は、片田舎へ行くと『ズロース』と間違えられて、劇場の看板に、れいれいしく『ズロースの女王淡谷のり子』など書かれていたという笑い話もあった。」

「別れのブルース」につぐ「雨のブルース」で当てた服部良一は、この後、ジャズのフィーリングを生かした和製ブルース、タンゴなど一連の欧米ナイズされたモダンな曲を次々に提供するが、ヒット曲には戦前だけでも次のようなもの

が並んでいる。

まず、淡谷のり子の「雨のブルース」と「別れのブルース」を筆頭に、霧島昇・渡辺はま子の歌った「蘇州夜曲」、中野忠晴の「チャイナ・タンゴ」、霧島昇のモダン感覚を出した「一杯のコーヒーから」「胸の振り子」、高峰三枝子の代表曲となった「湖畔の宿」、日本初のスキヤット唱法となったコロムビア・ナカノ・リズムボーイズの「山寺の和尚さん」、そして渡辺はま子の「いとしあゝの星」などだった。

四千曲を越える服部メロ

ディーの中で、「一番印象深い」と自認する曲は「蘇州夜曲」で、皇軍慰問団の一員に参加して、中国大陸の日本占領下の各地を廻り、その風景とチャイナ・メロディーに触発されて、五線譜に綴ったものだった。

今日でも時代の古さを感じさせない情緒豊かな歌曲である。

もともと李香蘭、長谷川一夫主演の映画『支那の夜』の中で、李香蘭が美しいソプラノで歌うという前提で作られた曲で、服部は当時、次のように語っている。

# 東京ブギウギ

鈴木勝 作詞  
笠置シズ子 歌

敗戦後の日本に、復興の息吹きと活力を与えた感のある曲であった。

歌ったのは、この一曲の大ヒットで「ブギの女王」の名をほしいままにする笠置シズ子で、昭和二十三年一月に発売された。

服部は戦時下、軍部に疎まれて彼の作曲した歌は次々に発禁になり、「服部メロディー」ならぬ「発禁メロディー」と揶揄されていた。戦争が終るや、この屈辱を

吹き飛ばす勢いで、笠置シズ子を起用し、ジャズを歌わせるが、ブギウギのリズムに乗せたのは、二十三年に入ってからだった。

服部がアフター・ビートのブギのリズムで「ソ・ラ・ド・ミ・レ・ド・ラ」のメロディーをつかんだのは、終電間近い中央線の中だった。彼は電車が西荻窪駅に着くや、駅前の喫茶店に飛び込み、ナプキンに夢中でこのメロディーを書きつけたという。

詞は、旧知の鈴木勝に頼み、ピアノで何度も聞かせて「躍動するリズムだから、調子のいい韻語がほしい。言葉に困れば「東京ブギウギ リズムウキウキ」を繰り返せばいいんだ」とレクチャーし、半ば自分も加わって歌詞を書きあげていた。

歌は、戦前から交流のあった笠置シズ子を起用したが、彼女は初めてのブギウギの吹込みに当って、パンチのある野性にあふれた咆哮ほうこうのような唱法で、ビートに乗って腰をふり、足を蹴上げて全身で歌いあげたのだった。

# 雨のオランダ坂

菊田一夫 作詞  
渡辺はま子 歌

「雨のオランダ坂」は、昭和二十一年、菊田一夫の新国劇『長崎』の中で、カフェの女給が歌うシーンの歌が必要となり、菊田の詞では常連だった作曲家の古関裕而に「大至急作ってくれ」の依頼で、急遽作曲されている。

天性のメロディー・メーカー古関は、このとき、菊田一夫の詞を一読して、「菊田さんらしい抒情とロマティックな情熱のある美しい詞だ」

と、大いに作曲意欲をそそられ、長崎の風景をイメージによりがえらせ、曲想を練ったという。

彼の知る長崎は、原爆で破壊されるはるか前の昭和十年頃で、当時の長崎の街には南国の香りと、異国情緒があふれていた。

クラシックに造詣が深い古関は、「雨のオランダ坂」の間奏に、プッチーニの長崎を舞台にした『マダム・バタフライ』の有名なハミングコー

ラスの一部も取り入れて、情緒を盛り上げることも忘れなかった。

歌は渡辺はま子だったが、三拍子で歌って間奏に四拍子の独特な味付けを試みた「雨のオランダ坂」は、作曲家自身をして会心の作と言わしめる文字通りの佳曲に仕上がっていた。

翌年の昭和二十二年には同じ菊田一夫原作の松竹映画『地獄の顔』でも「夜霧のブルース」「長崎エレジー」「夜更けの街」とともに劇中歌として使われ、四曲ともヒットした。

# 吉田 正

(1921 ~ 1998)

茨城県日立市生まれ。陸軍に入隊するが、敗戦後シベリアに抑留される。抑留地で作曲した、のちの「異国の丘」が復員兵によって紹介される。没後、国民栄誉賞を受賞。



## ●抑留兵のもたらした歌

昭和二十三年八月一日は日曜日であった。ビクター専属作詞家の佐伯孝夫は、その日「素人のど自慢」を聞くともなしに聞いていた。

すると、シベリアからの復員兵と名のる中村耕造があらわれ、「浮虜の歌える」を、「この歌は、シベリアの抑留所で、だれが作ったかわからないままに歌われていた望郷の歌でした」

と前置きをして、極寒の地に囚われの身となり帰国を一日千秋の思いで待つ兵士たち

の心情を、ひびきのある声で朗々と歌い合格した。

それを聞いた佐伯孝夫は、胸に迫るものを感じ、さっそく補作し清水保雄の編曲で竹山逸郎に一番を、「のど自慢」の中村耕造に二番を歌わせ、「異国の丘」の題で発売したところ、歌は大ヒット。作詞・作曲者さしが始った。

まず作詞した増田幸治が判明したが、作曲者の吉田正が、米山正夫にあと押しされて名のり出るまでには、数十人の自称作曲者が出ていた。

ビクターは早速、吉田正と専属契約を結び、「異国の月」

「異国に祈る」「東京の星空」を作曲したが不発で、「流れの船唄」の「船もの」を経て、鶴田浩二の歌った都会調歌謡「街のサンドイッチマン」で当てるまでには、数年に及ぶ雌伏時代があった。

吉田は第二のヒットを得るまでには、印税を注ぎ込んで、銀座、赤坂の高級クラブ、バーを巡り歩き、盛り場の夜のハウンティングを怠らなかつた。

理由は、「大衆歌謡は机の上にあります。歌謡の詞と曲は必ず街にあると思っていましたから、街へ出て街のたたずまい、ファッション、

若者たちの言葉づかいなどを聞いたり、見たりしていたのです」と私に語ってくれた。

吉田を晴れて作曲家に位置づけた「有楽町で逢いましょう」との出会いが劇的だった。

関西のそごう百貨店が、神武・岩戸景気により、有楽町駅前に東京進出を企てた時、そこうは前宣伝のキャッチフレーズに、口当りのいい「有楽町で逢いましょう」を、新聞、ラジオ、雑誌に使って洪水のように流しつづけた。

作詞家の佐伯孝夫は「有楽町…」を耳にし「これはいけそうだ」と、ビクターに話を

持ち込み、作曲は新境地を開きつつある吉田正を起用することにした。歌はジャズから歌謡に転身を図りつつあるフランク永井を指名した。

一方ビクターは、映画会社、芸能誌、デパートともタイアップして、有楽町キャンペーンを行い、その相乗効果もあって歌は大ヒット。「有楽町で逢いましょう」は、流行語になった。

身を持つことに厳しかった吉田は、

「この曲のヒットで作曲家として、ようやくメシを食える自信を持ちました。それまで、

のど自慢の審査で各地へ行っても、宿帳の職業欄に『作曲』とまでは書けましたが、『家』は入れられなかった。『有楽町』が出てから、やっと小さくも『家』を入れられるようになりました」

と、私に話してくれている。佐伯・吉田・フランクのトリオで、『夜霧の第二国道』『東京午前三時』など、夜のムード歌謡が次々にヒットするのは、この後からだった。

### ● 「再会」は曲の頂点

作曲家として自他ともに認められる立場になった吉田

は、松尾和子&和田弘とマヒナスターズの「グッド・ナイト」「東京ナイト・クラブ」をヒットさせ、昭和三十五年、ムード歌謡の頂点ともいえるべき「再会」を作曲する。

「異国の丘」で、作曲家へ誘ってくれた佐伯孝夫の作詞。歌はフランク永井に見い出され、吉田の門下に入った松尾和子だった。

「佐伯先生の詞がすばらしかった。私の曲はいい詞が前提にある。詞がよければ作曲しやすい。聞く人にいかにわかりやすく書くかが私の基本ですが、『再会』は私のムー

ド歌謡の到着点だったと思います」

と語り、「再会」を書き終って、これ以上の曲はもう書けないだろうと思ったという。

歌は松尾和子が歌っていて、生前に彼女は、

「『再会』は私のいちばん好きな曲です。でも歌えば歌うほど難しい歌です。最初のレコーディングのとき、二番で音程を狂わして泣いてしまいました。先生はそれをお採りになったんです」

と告白している。

半音階を多用した難しいメロディーだった。和子は、そ

# 世界は二人のために

山上路夫 作詞  
佐良直美 歌

りかねないことだった。

アルトの佐良直美の音域に  
合わせて、つぶやくように歌  
い出す「世界は二人のために」  
は、サビの部分で少々高い音  
に転じる以外は、モノローグ  
の語りを思わせる低音域でま  
とめられた、ユニークな歌  
だった。

の名詞を提示し、つづいて「あ  
なたと二人」を繰り返す構成  
になっていて、二番になると、  
「空」「海」「道」「丘」の後に、  
「あなたとおおぐ」「歩く」「見  
つめる」「登る」などの動詞  
が付いていることだった。

直美は、笑顔で歌いながら、  
この点にずいぶん神経を使っ  
たと言う。また、淡々と歌わ  
れているように聞える「世界  
は二人のために」は、起伏が  
少ない曲だけに、たいへん難  
しい歌であった。いずみの内  
弟子は、期待に答えて見事に  
歌いこなし大ヒット。

いずみたくの曲に、山上路  
夫が詞を書いていたが、その  
詞は歌手を悩ます流れになっ  
ていた。

一番は「あなたと二人」の  
繰り返しだから、「愛」だの  
「花」の順序を間違えても通  
じるが、二番の「空」「道」「海」  
「丘」で次の詞藻をミスする  
と道を仰いだり、海を歩くと  
いったナンセンスソングにな

直美は日本レコード大賞の  
新人賞を受賞。

それは、一番の各フレーズ  
の頭に、「愛」「花」「恋」「夢」

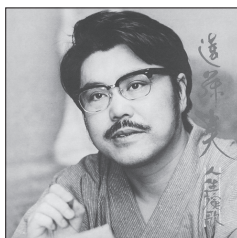
同時にNHK紅白歌合戦に  
初出場を果たし、以降、昭和  
五十四年まで連続十三回出  
場。「世界は二人の…」を三  
度歌っている。



# 遠藤 実

(1932 ~ 2008)

東京都生まれ。戦後の歌謡界を代表する作曲家。17歳で上京、流しの歌手をしながら作曲を学ぶ。歌謡界では古賀政男、服部良一、吉田正に次ぐ四人目の国民栄誉賞を受賞。



## ● 流しからスタート

日本人の琴線にふれ、時代を超えて生まれ、歌いつがれている分野に、「演歌」「艶歌」「援歌」「縁歌」と「エンカ」でくくられる部類がある。

演歌は昭和の初期、作曲家・古賀政男によって確立されているが、戦後、この分野でもっともヒット率が多く、数多くの歌手を育てたのが遠藤実であった。

七十六年の生涯に、世に送り出した曲は五千曲以上と言われ、遠藤の曲でヒットし、人気を掴んだ歌手には、千昌

夫、舟木一夫、こまどり姉妹、五月みどり、山本リンダ、杉良太郎。遠藤メロディーで人気を補強した歌手に藤島桓夫、島倉千代子、北原謙二、北島三郎、小林旭、渡哲也、渥美二郎、牧村三枝子、小林幸子など、錚々たる名をあげることができた。

ヒット率二、三%といわれる厳しい演歌部門で、遠藤実の曲は抜群の成績を誇っているのだ。

このヒット曲の匠は、家が貧しく高等小学校を終えて、十四歳で新潟県西蒲原郡内野町の日東紡績内野工場で工員

になつてゐる。

昭和七年七月六日、東京市向島区（現在の墨田区）に生まれてゐるが、太平洋戦争の末期に、父の出身地、新潟県西蒲原郡に疎開してゐたからだった。

この後、農家の作男になるが、当時、「牛になりたい」と思つてゐたと語つてゐる。悪い例えだが、牛は日中の労働が終れば、夜は牛舎で休める。ところが、作男は夜も遅くまで酷使され、満足に休めなかつたからだつた。

十六歳で山乃家菊丸とコンビを組み、人家を一軒々々

回つて歌い、わずかなお金をもらう「門付け」を始めた。その厳冬のある夜、あまりの寒さに凍えた手を温めるために、路傍で小便をかけて暖をとつたこともあつた。

昭和二十四年七月、十七歳で上京、わかめの行商など様々な職を経た後、ギターを携えて流しの演歌師になつた。

荻窪界限を流してゐて、たまたま飲み屋で出会つたのが日本マーキュリー専属作詞家の松村又一だつた。

その縁で遠藤は、悲願だつたレコード歌手への作曲の道

が拓け、星幸男のペンネームで作曲した松村又一作詞「破れソフトのギター流し」が、藤島桓夫によつて歌われ、狭いながら作曲家の門戸が開けた。

昭和三十二年、デビュー曲と同じこのトリオで出した「お月さん今晚わ」が初ヒットするが、この曲は遠藤自身が、松村又一に詞を依頼するとき、作男の苦難時代、ふとリンゴ畑の中で見た月に「今晚わ」と挨拶をしたエピソードを言い添えたことから、生まれてゐた。

つづく藤島の「アンコなぞ

泣く」もヒットし、遠藤実の名は、注目された。

彼は、マーキュリー専属の野村雪子、竹山逸郎、松山恵子、平野愛子といった、ひと花咲かせた歌手の曲も書き、その名は狭い業界に知れわたったのだ。

### ●一大ヒットメーカーに

根強い演歌部門で連続ヒットを飛ばした遠藤に、まず、コロムビアの敏腕プロデューサー馬淵玄三が、島倉千代子への作曲をひそかに打診してきた。

ビクターと双壁をなすコロ

ムビアからのオファーを受  
け、遠藤は感激で身が震える  
思いだった。自身、島倉の大  
ファンで、彼女の歌をつくっ  
てみたいと願ってもいた。し

かし、マーキュリー専属の身  
で、実名では作曲できないの  
で、米田信一の名で、昭和  
三十三年、西沢爽作詞の「か  
らたち日記」に作曲したところ、  
これが大ヒットし、晴れ  
て専属に迎えられた。

古賀政男が君臨するコロム  
ビアには、美空ひばりを筆頭  
に小林旭、コロムビアローズ、  
五月みどり、こまどり姉妹、  
村田英雄、神戸一郎、守屋浩、

北原謙二、北島三郎、島山み  
どり、青山和子らが目白押し  
で、作曲にはこと欠かなかつ  
た。

遠藤はこの社で充分に活躍  
した後、昭和四十年三月、契  
約を解き、島倉千代子らのパ  
ترونだった太平住宅創業  
者・中山幸市の設立した新興  
のレコード会社太平音響の専  
務に招かれた。

三年後、中山が死去すると  
二代目社長に推され、社名を  
自分の名前に因んでミノル  
フォンレコードに改名。制作  
をプロモーションに特化し  
て、アーティスト主導の新業

# 高校三年生

丘灯至夫 作詞  
舟木一夫 歌

舟木一夫を一躍スターダム

にのせた「高校三年生」は、貧しくて高校へ進めなかった作曲家・遠藤実の無念の思いが、隠し味になっている。作詞者の丘灯<sup>おかと</sup>至夫<sup>しお</sup>も病弱で満足に学んではいなかった。

期せずして一致した作詞・作曲家の果たせなかった進学の夢がヒットの原動力になったことは間違いなく、遠藤も私にそのことは語っている。

デビュー曲にと遠藤実からこの曲を示されたのは、愛知

県一宮市から上京し、高校へ

通いながら彼のレッスンを受けていた上田成幸だった。舟木一夫の芸名を与えたのは遠藤である。

昭和三十八年二月三日にコムビアスタジオで吹き込みをしているが、その日は上田成幸が高校三年生の時だった。しかし、レコード発売は高校卒業後であった。

もともと、「高校三年生」は、毎日新聞社のグラフィック雑誌編集部で働いていた丘灯至夫が、

高校体育祭の取材に行き、共学の男女生徒のフォークダンスを踊る姿に、鮮烈な感動を受けて作られていた。

戦前に育った者には「男女七歳にして席を同じうせず」の厳しい教えがあり、思春期の男女が手を取り合ってダンスに興じるなど、夢のまた夢だったのだ。

作詞家のこの衝撃は、作曲家に伝わり学園ものが誕生するが、「高校三年生」は一年でミリオンセラーになり、以降「学園ソング」としてシリーズ化され、「修学旅行」「学園広場」とつづく。

# 市川昭介

(1933～2006)

福島県郡山市生まれ。郡山工業高校卒。18歳で上京、歌手の高倉敏、鶴田六郎らの付き人をしながら作曲とピアノを独学で学ぶ。都はるみの育ての親として知られる。



## ● ニコニコ坊やの前半生

歌手を目ざし、一度は屈辱にまみれた前座歌手をつとめた後、作曲に転じたヒットメーカーは少くない。

遠藤実、浜圭介、弦哲也などがそうである。

畠山みどりの「恋は神代の昔から」「出世街道」、都はるみの「アンコ椿は恋の花」「涙の連絡船」などで、ミリオンセラーを連発した市川昭介も、歌手の高倉敏、鶴田六郎らの付き人（かばん持ち）をする傍ら、歌手を目ざした一人だった。

だが、自分のルックス、背かっこうなどからみて、いかにもステージ映えないことを自覚し、初歩の音楽練習曲集<sup>デジ</sup>を独学。歌謡同人誌から拾った好きな詞に曲を付け、各レコード会社へ売り込みに廻ったが、どこも無名の市川昭介を相手にしてはくれなかった。

その市川が、無名時代の星野哲郎と知り合ったことで、二人は一緒に新曲を作り、意地懸けてでも世に出ようと、七、八年間は作品づくり<sup>デジ</sup>に励んでいる。

星野はその著書『歌いとし

きものよ』で、

「二人で書いた作品の数はいちいち数えきれない。オクラ入りして陽の目をみなかった作品もおびただしい」

と苦難時代を綴り、

「私と昭介で作ったものがないかハットしなかった原因は、この昭介を必ず男にしてやらねば」という私の入れこみが過ぎて、彼の曲の入る余地のない詞ばかり書いていたからと書きたい」

と書いている。

二人の作品は、昭和三十七年、畠山みどりの「恋は神代の昔から」、翌三十七年、「出

世街道」のミリオンセラーで叶えられるが、市川昭介のデビュー曲となったのは、三十六年、島倉千代子が歌い、第三回日本レコード大賞・作曲奨励賞を受賞した西沢爽作詞の「恋しているんだもん」だった。

市川はこのヒットをきっかけに、翌年、前記のような大ヒット曲を出すのだが、常に笑顔を絶さないニコニコ坊やの本領を発揮するのは、都はるみという、すごい唸り節の新人を発掘したことからだっ

た。  
都はるみは、コロムビアの

新人オーディションに勝ち残り、西沢爽作詞・遠藤実作曲の「困ることよ」でデビューするが、不発に終わり、続いて「てれちやう渡り鳥」で市川昭介の曲を歌うが、これも駄目で、「二度あることは三度ある」の不吉なジンクスを覆すために、市川に連れられて星野哲郎邸へやって来たのである。

星野は、当時、コロムビアレコードから新興レコード会社クラウンへ移り、専属関係で、コロムビアにとどまった市川の曲に、詞は作れない立場にあった。

それを承知で、わざわざ都  
はるみという新人を連れて来  
たのは、「歌を書いてもらい  
に来たのではなく、この子の  
歌を聞いてほしい。こんな歌  
手は二度とあらわれない」と  
いう口実だった。

駆け出しの作詞家・星野哲  
郎の家には、当時ピアノはな  
くオルガンがあった。市川は  
そのオルガンを弾いて、はる  
みの唸り節を聞かせたのだ。  
はるみが、先輩歌手の歌を  
歌い出すと、星野の煙草を  
持った手がガタガタと震え出  
し、すごい衝撃を与えられた  
様が、そばにいた市川にもよ

くわかった。

歌い終ると、市川はニコニ  
コ顔で、「テツツアマ、書か  
なくていいからね、別に」と  
わざわざ言い残して帰って  
行った。

### ●市川オンリーのはるみ

都はるみを一躍、スターダ  
ムに押し上げる「アンコ椿は  
恋の花」は、二人が引き揚げ  
た後、はるみのすごい歌声に  
創作意欲をかきたてられた星  
野が、夜明けの三時ごろまで  
に一気に呵成に書き上げた詞  
だった。

はるみは、「アンコ椿は恋

の花」で第6回日本レコード  
大賞・新人賞を獲得し、以後、  
昭和四十六年に至る七年間に  
五十数曲レコーディングして  
いるが、作詞は星野哲郎を筆  
頭に、石本美由起、関沢新一、  
丘灯至夫、白鳥朝詠、吉岡治  
など、コロムビア専属のベテ  
ラン作詞家が、多彩な詞を提  
供していた。

ところが作曲は、一手に育  
ての親の市川昭介が書いてい  
て、「涙の連絡船」「さよなら  
列車」「初恋の川」「好きになっ  
た人」「はるみの三度笠」「男  
が惚れなきや女じゃないよ」  
と、そのヒット率も群を抜い

# 涙を抱いた渡り鳥

星野哲郎 作詞  
水前寺清子 歌

畠山みどりのために用意していた「袴をはいた渡り鳥」のメロディーをそのまま、「袴」を「涙」に急遽かえて、水前寺清子に歌わせヒットした歌である。

女だてらに、「男歌」を好んで歌う水前寺清子は、昭和三十六年、日本コロムビア全国コンクールで、北島三郎と優勝を争いコロムビアへ迎えられた。

三年在籍中に十一曲吹き込んだが、すべてがオクラ入り

になつて芽が出ず、星野哲郎に誘われて新興会社クラウンへ移籍したことで、畠山みどりに予定していた「袴」をはく幸運に巡り合う。

星野哲郎作詞、市川昭介作曲の手馴れた演歌で、彼女は出身地、熊本市の水前寺公園と、加藤清正の清に因んで水前寺清子の芸名でデビューすることになった。

お目見え曲になった「涙を抱いた渡り鳥」は、もともと袴をはいて歌う畠山みどり用

に作られていた「男歌」であったため、クラウンは、水前寺清子をボーイッシュスタイルの着流しで、動作も思いきつて無骨に振る舞う算段を図つたのである。

市川昭介は、鶴田六郎の鞭持ちとして七年間も居候生活の苦勞をしている。この間に独学で作曲の勉強をし、演歌の底に流れる庶民の喜怒哀樂を充分に藁籠中の物にしていた。

それだけに、歌手の経歴、声の特徴に合った曲づくりで、期待に充分応えることができたのである。



# 平尾昌晃

(1937 ~ 2017)

東京都生まれ。ジャズ喫茶「テネシー」で歌っている所を渡辺美佐に見出され、「日劇ウェスタンカーニバル」で大ブレイク。のち作曲家に転向、数々のヒット曲を生む。



## ● 吉田正の指南

ジャズ、ウエスタン、ロカビリーといったバタ臭い音楽からスタートした平尾昌晃は、途中で作曲に転じ「よこはま・たそがれ」「瀬戸の花嫁」と、リリシズムあふれる日本調の歌でヒットを連発した。

化粧品会社を経営する豊かな家に生まれた平尾は慶應高校を中退。ロックンロールの歌手として、日劇のウエスタンカーニバルに初出演して、知られた存在になる。

渡辺プロダクションの副社長・渡辺美佐の企てた舞台

で、『経済白書』に「もはや戦後ではない」と書かれた昭和三十年代の初めであった。

「リトル・ダーリン」「監獄ロック」で初ヒットを出すのが、強烈なロカビリーの追風もあつて、若者に熱狂的に受け入れられた。

当時、銀座、新宿といった東京の盛り場にはジャズ喫茶が人材を輩出していた。平尾昌晃は銀座の「テネシー」「ACB<sup>サブ</sup>」、大阪の「銀馬車」、神戸の「コペン」等のメインアーティストとして舞台に立ち、連日、ワンセット三十〜四十分のステージを昼に五

回、夜に五回と歌いまくった。

平尾、山下敬二郎、ミッキーカーチスなどは、興奮して駆け上った女の子に、ステージから引きずり下ろされそうになったり、押し倒される始末で、その狂乱ぶりに評論家の大宅壮一は、「気違い病院のシヨウだ」と揶揄したほどだった。

ところが、この狂乱ぶりには、渡辺美佐があらかじめ観客に因果をふくめ、演出していたとの噂が流れた。噂は事実だったのか、演出されたロカビリーブームは、すぐ退潮してしまった。

幼少から音楽的素養のあった平尾昌晃は、すでにこの時点で、「ミヨチャン」「星はなんでも知っている」の自作曲をヒットさせていた。

賢明な彼は、都会的なムード歌謡がブームになり、フランク永井の「有楽町で逢いましょう」がヒットすると、作曲した吉田正の曲を歌いたくなくて、昭和三十五年にキングレコードからビクターに移籍し、吉田正の門下生になっていた。

人呼んで吉田学校ヘレッシンに通うことになったが、吉田の教え方は独特で、狭い応

接室でピアノを弾きながら、自分でまず歌って聞かせた。吉田の歌は大変うまく、平尾が聞きほれるほどだった。師は細かい技術的なことには触れないで「言葉を歌いなさい」と言い、「間奏も歌なんだよ」「短い曲にも小さなドラマが必ずある。歌っていないときも、曲の雰囲気の中にいなければ、人の心をつかめない」といった「歌とはなんであるか」の基本をじっくり教えてくれた。

そして吉田の指南は、平尾のその後の作曲家人生に大きな礎となった。

# 猪俣公章

(1938 ~ 1993)

福島県会津坂下町生まれ。日本大学芸術学部卒。古賀政男に師事。森進一のデビュー曲「女のためいき」以降「港町ブルース」「おふくろさん」と森のヒット曲を連発。



## ● 演歌の虫の真骨頂

後に作詞家・直木賞作家となる山口洋子は、東京のメイストリート銀座に『姫』という高級クラブを経営していたのだが、「黙って座るだけでん万円は請求される」と冗談口をたたかれるほど高額な店で、売れっ子作家やプロ野球選手、芸能人、総会屋、ヤクザの顔役、ジャーナリストたちが出入りし、華やかなミッドナイトを繰りひろげていた。

掠れ声で人気歌手になった森進一のヒット曲「女のため

いき」「港町ブルース」、水原弘のカムバック曲「君こそわが命」で当てた作曲家・猪俣公章は、昭和四十年代後半から五十年代にかけて、この『姫』に毎晩のように顔を出していた。

血統をたどると、山口洋子の血脈とどこかで触れ合うとの噂もあり、彼女の直木賞受賞作『演歌の虫』の中に作曲家・一谷直行の名前で描かれていた。

猪俣は、一般には「こうしゅう」と呼ばれていたが、本名では「きみあき」と読み、福島県河沼郡会津坂下町に昭和

十三年四月に生まれた。

東京の進学校・開成高校から日本大学芸術学部音楽科に学び、演歌の大御所・古賀政男の内弟子になれた。はたからみたら僥倖ぎやうこうの身と考えられるが、四年間を通じて「作曲をしてみる」のチャンスどころか、書いた作品の一曲すら見てもえなかつた。

しかし、猪俣は古賀邸の倉庫に何千曲と山積みにされた古い楽譜の整理を命じられた。楽譜を読む猪俣にとつては、古賀政男の真髄にじかに触れられる絶好のチャンスだった。

彼はちりまみれの倉庫の中で、古びた楽譜を一枚一枚読み、古賀の曲の成り立ちを、血とし肉にしたのだった。

さらに、古賀の新曲を聞く「お聴かせ会」という会合が、古賀邸二階でコロムビアレコードの文芸部、歌手とあるが、その時、猪俣はこっそり階段下に行き、一部始終を盗み聞きしていた。

その盗み聞きによつて、古賀メロディーがどのようにして生まれていくかの過程と、レコード会社のディレクターの役割と、ヒット曲を生み出すための戦略、そして時代が

どんな曲を求めているかの流れが、つぶさにわかるのだった。

古賀からじかに教わるより、この盗み聞きで得た作曲法は、猪俣公章の人生にとつて何ものにも変え難い授業だったのである。

日大三年のとき、古賀の門下生になったが、猪俣が森進一のデビュー作にして八十万枚のヒットとなった「女のためいき」を書くまでには、七年近い歳月が必要だった。

猪俣公章の作曲家人生を確立した水原弘の「君こそわが命」が生まれたのは、その「女

# 大阪ラプソディー

山上路夫 作詞  
海原千里・万里 歌

藤山一郎の豊かな歌唱力で一時代を画した「東京ラプソディー」に対し、海原千里・万里の「大阪ラプソディー」は、東京に遅れること四十年の昭和五十年にリリースされた。

大阪の名所が織り込まれ、その見どころに触れながら、そぞろ歩きの恋人同士の心の動きを描いた歌だった。

山上路夫作詞、猪俣公章作曲の典型的ご当地ソングで、大阪を冠した多くの歌の中

で、最も人気が高い曲のひとつになっていった。その理由のひとつは、大阪漫才で知られた海原千里・万里が息の合ったデュエットを聞かせていることだった。

千里と万里は実の姉妹で、本名は万里が芦川百々子で、千里が上沼恵美子であった。姉妹は幼少期から素人コンクールに出演していたが中学校卒業後、海原お浜・小浜に入門したのを機に、万里・千里の芸名で姉妹漫才コンビで

デビューした。

昭和四十八年にテイチクから「幼なじみでおないどし」で歌手デビュー。「初恋日記」などをリリースするが、ヒットには遠かった。

そして、ビクターに移籍し、再デビューの意気込みで歌ったのが、大阪ムードたっぷりな「大阪ラプソディー」だった。

メインパートを妹の千里が、サブを姉の万里が息もぴったり歌い、大阪の水に合ったラプソディーは、ご当地から火がつき全国へと広がり四十万枚も売れた。

## 参考資料

- 「日本流行歌史」 古茂田信男 他 社会思想社  
「日本流行歌変遷史」 菊池清麿 論創社  
「この人この歌」 斎藤茂 廣済堂出版  
「歌謡曲の構造」 小泉文夫 冬樹社  
「昭和の流行歌の軌跡」 池田憲一 白馬出版  
「歌謡・いま・昔」 毎日新聞社芸部 音楽之友社  
「わたしのレコード 100 年史」 長田暁二 英知出版  
「歌でつづる 20 世紀」 長田暁二 ヤマハミュージックメディア  
「精選盤 昭和の流行歌」 長田暁二、他 ユーキャン  
「にほんのうた」 北中正和 新潮文庫  
「紅白 50 回 栄光と感動の全記録」 NHK サービスセンター  
「サウンド解剖学」 宮川泰 中央公論社  
「不滅の歌謡曲」 なかにし礼 日本放送出版協会  
「歌謡曲から『昭和』を読む」 なかにし礼 NHK 出版新書  
「歌謡曲の時代」 阿久悠 新潮社  
「歌謡曲って何だろう」 阿久悠 日本放送出版協会  
「ハマクラの音楽いろいろ」 浜口庫之助 朝日新聞社  
「阿久悠のいた時代」 篠田正浩・斉藤慎爾編 柏書房  
「なつめろの人々」 藤浦洸 読売新聞社  
「どうにもとまらない歌謡曲」 舌津智之 晶文社  
「そして歌は誕生した」 NHK 土曜特集班編 PHP 研究所  
「日本のポピュラー史を語る」 村田久夫・小島智編 シンコー・ミュージック  
「美空ひばり」 竹中労 朝日文庫  
「この歌 この歌手」上・下 読売新聞文化部 社会思想社  
「日本レコード文化史」 倉田喜弘 岩波現代文庫  
「酒と演歌と男と女」 猪俣公章 講談社  
「歌 いとしきものよ」 星野哲郎 集英社  
「演歌巡礼」 船村徹 講談社  
「歌謡曲ベスト 1000 の研究」 鈴木明 TBSブリタニカ  
「自伝 わが心の歌」 古賀政男 展望社  
「鐘よ鳴り響け」 古関裕而 主婦の友社  
「夢人生を奏でて」 古賀政男 小学館スクウェア  
「ぼくの音楽人生」 服部良一 日本文芸社  
「翔べ！わが想いよ」 なかにし礼 東京新聞出版局  
「六・八・九の九」 永六輔 中央公論社  
「なぜか売れなかったぼくの愛しい歌」 阿久悠 河出文庫  
「よみがえる歌声」 林家たけ平 ワイズ出版  
「誰よりも君を愛す」 吉田正 金子勇 ミネルヴァ書房  
「体験的音楽論」 いずみたく 大月書院  
「海鳴りの詩」 小西良太郎 集英社  
「うた王国・百鬼夜行」 小西良太郎 廣済堂出版  
「昭和流行歌スキャンダル」 島野功緒 新人物文庫  
「あの素晴らしい曲をもう一度」 富澤一誠 新潮新書  
「カラオケ中年隊がゆく」 カラオケ中年隊編 文春文庫

## 塩澤実信（しおざわ・みのぶ）

1930（昭和5）年、長野県生まれ。双葉社取締役編集局長をへて、東京大学新聞研究所講師等を歴任。日本ペンクラブ名誉会員。元日本レコード大賞審査員。主な著書に「雑誌記者池島信平」（文藝春秋）、「ベストセラーの光と闇」（グリーンアロー出版社）、「動物と話せる男」（理論社）、「出版社大全」（論創社）、「ベストセラー作家 その運命を決めた一冊」「出版界おもしろ豆事典」「昭和歌謡 100 名曲 part.1 ～ 5」「昭和の歌手 100 列伝 part1 ～ 3」「昭和平成大相撲名力士 100 列伝」「不滅の昭和歌謡」（以上北辰堂出版）、「昭和の流行歌物語」「昭和の戦時歌謡物語」「昭和のヒット歌謡物語」「この一曲に賭けた 100 人の歌手」「出版街放浪記」「我が人生の交遊録」（以上展望社）ほか多数。

## 歌謡曲が輝いていた時 昭和の作曲家 20 人 100 曲

2020 年 2 月 20 日 初版第 1 版印刷

2020 年 2 月 25 日 初版第 1 刷発行

著 者 塩澤実信

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

〒 101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル 2F

電話 03(3264)5254 FAX 03(3264)5232 <http://www.ronso.co.jp>

振替口座 00160-1-155266

編集／今井恒雄

装幀／宗利淳一

印刷・製本／中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1913-6 ©Shiozawa Minobu 2020 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

日本音楽著作権協会（出）許諾第 2000595-001 号